

ディエゴ加賀山隼人の生涯

・出生と受洗

1566年、高山右近の領地・高槻（現大阪府北部）で生まれました。10歳になったとき、イエズス会の神父ルイス・フロイスから洗礼を受け、洗礼名（ディエゴ）を授けられました。キリストの12使徒ヤコブのスペイン語読みです。

・信仰の礎

その後、安土（現滋賀県蒲生郡）にあったイエズス会のセミナリオ（神学校）で学び、信仰を深めました。この時期にイエズス会の「霊操」（spiritual exercise）に触れ、霊性の礎が築かれたのではないかと推測されます。

・士官職としての生

やがて武士となり、高槻城主ユスト高山右近に仕え、その後丹後の宮津城主細川忠興に仕えました。そして1600年、忠興に従って九州に下り、豊前国（小倉・中津）の地を踏むことになりました。

豊前では主君忠興の信任を得て、豊前下毛郡（現大分県中津）の郡奉行になり、多くの領民を善導して厚い信望を得、間もなく藩の国家老に任ぜられました。

・信徒使徒職としての生

一方、豊前の司牧者セスペデス神父の指導を得て、教会の内と外の接点役として信徒使徒職に励み、多くの信徒の模範となり、まだ若い小倉教会の共同体づくりの支柱的存在となりました。

・殉教者としての生

1611年、忠興はキリシタン禁制の時勢に準じ、信頼の厚い隼人に対しても再三棄教を迫りました。しかし、信仰に不退転の隼人は、家老職を取り上げられ、数年間家族ともども軟禁生活を強いられても、保身や功名よりも神のみ心に従う日々を選びました。

1619年10月15日、そんな隼人に対し、忠興は死罪の宣告を下さいました。その日、隼人は殉教地となる干上がり（日明）に小舟で運ばれる間、自分を主に委ねるために静かに祈りと黙想に浸り、刑場の丘に着くとイエス・マリア御名を5回唱え斬首の刑に身を投じました。享年54歳でした。

加賀山半左衛門と息子ディエゴの殉教

細川忠興が1602年小倉に移る際に、自分の息子忠利を中津に、国東と速水を守るために日出に義弟の木下延俊を置きました。

忠興は信頼する隼人の従兄弟である加賀山半左衛門を木下延俊の家臣としました。

半左衛門は日出で港に出入りする船や荷物などの税金の徴収と管理をする仕事をしていました。

しかし、当時日出には教会はなく司祭もいませんでした。

そのため半左衛門の妻ルチアは小倉にいた隼人に教会と司祭が必要である旨を伝え、隼人はセスペデス神父に頼み、小倉から一人の司祭が派遣されました。

なお、日出、速水、国東半島一帯は宇佐神宮や仏教徒の勢力が強く、半左衛門たちは、その地域での布教や教化には苦勞したようです。

・迫害

1611年のセスペデス神父の急死をきっかけに細川忠興はキリシタンの弾圧に踏切り、日出の木下延俊もキリシタン迫害を決定しました。

そのため半左衛門も職を奪われ、その家族も苦しい生活をする事になりましたが、たとえ信仰を棄てるように迫られても決してそうすることはありませんでした。

・親子の殉教

1619年10月15日、加賀山隼人が殉教したその日、半左衛門に突然死刑の宣告がなされました。

その宣告に彼は動ぜず、殿に誠意を述べました。

それから自分の家に入り、母ジュスタ、妻ルチア、娘テクラに最後のあいさつをして、神に殉教の恵みを感謝しました。

近くにいた役人からどこで処刑されたいのかを聞かれると、半左衛門は「あなたの思いどおりにしてください」と答えました。

それを聞いていた娘テクラは、何一つ悪いことをしていない父に対して心休まる家の中で斬られてくださいと懇願しましたが、半左衛門は

「キリストは何の罪もないのに公の刑場で二人の盗賊の間で処刑された。自分でもできる限りキリストに倣って処刑されたい」

と言いました。

そして、御絵の前にひざまづいて祈り、まるで祝い事のように妻と娘から足を洗ってもらい立派な服を着て、片手に御絵、もう一方の手に火を灯したろうそくを持って刑吏の方に進んでいくと、息子ディエゴが近づいてきて、「私も一緒に神様のところに連れて行ってください」と涙を流しながら頼みました。

半左衛門はそれを拒みましたが、ディエゴがすがりついて言うことを聞かないので刑場まで付いてくるのを許しました。

しかし、このとき幼子ディエゴにも処刑命令が出ていたのを半左衛門は知りませんでした。

半左衛門が処刑場に着くと次のように役人たちに話しました。

「私が殿の意向をのんでキリスト教を棄て風習に従って転宗するよりかは、キリスト教に背かず殺される事をあなたがたは不思議に思い私が気が狂っていると思っていますでしょう。

しかし、私がこうして殉教するのは、信仰によってのみ人類は真の靈魂の救いへと到達することを知っているからということをおわかってください。

私は罪を犯した覚えがないからどうか私について哀れみをかけないでください。

私はキリシタンの信仰という理由で殺されることを良しとするだけでなく、栄光に満ちた事だと考えていることをわかってください。」

このように話終わるとひざまづいて首に刀を受けました。

これを見ていたディエゴは恐れることなく父の亡骸に近づき横たわって確認した後、これにひざまづいて手を合わせ「キリスト、マリア」の名を唱え、父が斬られた同じ刀で斬られました。

半左衛門 47 歳、ディエゴ 5 歳のときの殉教でした。

(大分教区殉教の証し特別委員会 「バルタザル加賀山半左衛門と息子ディエゴの殉教」より)